

奄美における「成巫」の語りと読み

Narratives and Interpretations on the Religious Initiation
in Amami Islands

森 雅文

はじめに

- ①「生活史」と成巫認識
- ②「成巫過程」の読み
- ③カミ生成の語り
- ④結語

【論文要旨】

奄美の民俗宗教の担い手は、世襲型プリーストと召命型シャーマンの類型に準えた公的「ノロ」と私的「ユタ」の弁別に従って対比的に区分されてきた。この弁別は、社会統合原理を希求する共同体研究が祭祀者の地位継承を出自論的に理念化する一方で、シャーマニズム研究が成巫語りを個人の領域に配置したことで固定化された。「成巫過程」分析においては、「ノロ」が示す召命観や「ユタ」が語る世襲観が理念型からの逸脱として例外化され、世襲・召命論への摺り合わせが再生産される。この弁別は、南下した「大和」の影響を政治領域に幽閉しながら、南西諸島域の文化的中心に沖縄をおく「琉球」言説の制度化にも寄与した。

「ノロ」と「ユタ」を含む現実の宗教者（カミ）の成巫語りは、類型的弁別への集約や理念枠組みの保持を求める研究者の目論見をすり抜ける。両者の差異は個別的な祭神や個人の能力差に還元され、儀礼実践に見合う祭祀者を要求する社会の期待も従来の弁別論を支持しない。正体の暴露や地位の転換を示す神話的物語の形容句となる世襲と召命の言説は、ともに相対化された「個」を生成する『生まれ』の語り場に配置され、その併存は語り場の位相として理解される必要がある。召命の観念では、カミの特異性を人に対峙する神霊に付随させて解体することで「人」概念の同質化を果たすと同時に、カミの正当性を保証する絶対的権威を外在化させる。継承の観念では、その特異性を非人格的な宗教的可能性の発現に依拠させることで、カミの個別的才能の突出性を内在的に保証する。両観念の併存は、奄美の個別的な人間関係上に形成される緩やかなヒキ観念によって対立することなく、補完的にカミの位相を語り続ける。

キーワード：召命、世襲、自己神話、シャーマニズム研究、共同体研究